

## 少数にて常に少数にて…

五十年前の岩手女子師範時代の教え子千葉芳子さん（女性校長第一号？）の今年の年賀状は六枚便箋の長文だったが、その一節に、

…戦局も厳しく、真冬でもストーブのない教室での授業は、先生方のお話も頭に入るどころではありません。吉田先生は、オーバーを着なさいと仰しゃって下さったので、皆で紺色のオーバーを着てほっとして授業を受けました。早川先生の時間に、教壇に立たれるや否や「何だっ！ この戦時下に！ すぐ脱げっ！」。すごい雷が落ち、あわてて脱ぎました！。

教室は零下十度。教官室はストーブが赤々と。栄養失調は極限に至って、娘たちの顔に生気はなかった。全寮制で当然、配給米はあるが、舎監たちはその一部をこっそりドブロク作りに回していた。

早川氏、校長をしのぐ力を振るっていたが、私はわが方針を貫いた。脱いだり、着たり、女生徒たちは大変だっただろう。早川氏も教育学担当、しかし、皇道宣伝一本

槍。私も同じ科目。教科書は国から「国体の本義」が強請されていた。ひどい内容、だから「自分で読んで分からん点は質問せよ」と言うにとどめ、一ページも開くことはなかった。当然、質問もなかった。

警察が内偵しているとのうわさでひるんだが、今更変身もできない。命をかけるしかない。二十五歳の未熟さは自らをただ破滅への道に。

しかし敗戦で命拾い。皇道派の早川氏はいち早く変身、こんどは文部省でアメリカ思想宣伝に身命を捧げたのか、数年で死んだ。対立者より後に生き残ることは何よりもよいとつくづく思う。主流を歩けない者のせめてもの慰めとしよう。

先年彼女たちの同窓会でひとり「卒業最後の授業で吉田先生は、この学校で学んだことの正反対をすればまちがいない、と教えられた。あれから四十年ずっとその言葉が頭から離れない」と。私は彼女たちに告げたかった。「私だって主流を歩きたいよ。できなかつただけだ。未熟すぎた。この未熟さは死ぬまで続くよ、ね」

(一九九一年一月二十五日)